

日本トルクメニスタン・フォーラム
麻生太郎 副総理兼財務大臣兼金融担当大臣
御挨拶

ベルディムハメドフ・トルクメニスタン大統領閣下、御列席の皆様、
ただいまご紹介いただきました麻生太郎です。

1. 導入

わたしと中央アジアとの関わり合いは古く、今から16年前の1997年、当時経済企画庁長官として中央アジアの3カ国を訪問したのが最初です。残念ながらこれまでトルクメニスタンを訪問する機会には恵まれておりませんが、シルクロードに位置するトルクメニスタンに、わたしは常々関心を抱いておりました。

多くの日本人にとっては、長らくトルクメニスタンはあたかも秘密のベールに包まれておりましたが、近年、日本でのトルクメニスタンへの関心は大いに高まっていると感じます。事実、本日のフォーラムには日本の各界を代表する250名以上の方々が詰めかけ、この帝国ホテルの大ホールは満員御礼であります。

2. 日本とトルクメニスタン

似た者同士が仲良くなることはよくあることですが、生まれも育った環境も全く異なる者同士が惹かれあうことも、ままあるものです。日本とトルクメニスタンは、後者のケースであろうと思います。

一人は大陸の砂漠の民、もう一人は海に囲まれた山がちな島国の民です。

一人は馬に乗って広い大地を駆け回るのが日常でありますから、機動力が命、強いリーダーシップが求められます。もう一人は日がな一日田んぼに出て作業をしておりますから、まさに一步一步、みんなと歩調を合わせてことを運びます。

一人は豊かな資源に恵まれた広大な土地に住んでおりますから何事にもおおらか、豪華絢爛なものが大好き。もう一人はとにかく土地も資源も限られておりますから、節約を旨とし、細部にこだわります。

しかし、この二人は心のどこかで通じ合うものがある。なぜでしょうか。それは、お互いに、家族や先祖を大事にする、年長の人や目上の人を尊敬する、伝統を大切にする、一度した約束は必ず守る、一度何かを始めたら最高の水準を目指して努力する、といった、言うなれば共通のアジア的なメンタリティの基層があるためではないか。わたしはここがキモであると思います。それがあるからこそ、二人は、互いに強く惹かれあう関係となるのではないかと思います。

3. 協力の地平を切り拓く

(1)トルクメニスタンは世界第4位の天然ガス埋蔵量を誇る「資源大国」であり、2011年のGDP成長率は14.7%、12年は11.1%と、2ケタ成長を達成しております。一方の日本は世界の「技術大国」です。また、資源のない日本はヒトを何より大事にし、人材育成を重視する。

各国との間でも、技術や機材導入等のハード面のみならず、人材育成等のソフト面をセットで協力するのが「日本流」です。わたしは常々考えるのですが、日本人は本当に仕事が好き、研究が好き、そして人を育てるのが好きな国民です。共に汗を流しながら働く中で技術を伝えていくのが大好きな国民なのです。かつて、自衛隊がイラクで人道復興支援活動を行ったサマーワでは、日本は同時に多くの医療・インフラ機材の供与や人材育成を行い、イラク政府に感謝されました。

わたしは、日本とトルクメニスタンがお互いの持つものを掛け合わせることで、協力の新しいフロンティアを開くことができると確信しています。

(2)具体的な協力分野に沿って考えてみましょう。

まず、天然ガスの加工分野です。トルクメニスタンは内陸国であり、天然ガスを輸出する際にはパイプラインを敷設する必要がありますが、これは大変な作業です。ガスはある。需要もある。しかし輸送ルートは限られている。トルクメニスタンが直面しているこの状況を日本の技術なら打ち破ることができます。

この後、ガス化学に関して多くの文書への署名が予定されていますが、日本のガス化学技術は、文字どおりトルクメニスタンの経済に劇的な「化学変化」をもたらします。日本が独自に開発した天然ガスの液体燃料化技術(GTL)はじめガスの製品化技術は、トルクメニスタンにとり世界のマーケットを切り拓くものです。これはパイプラインを通じた単なる輸出ルートの多角化ではなく、もはや「異次元の多角化」と呼べるものであります。

こうした分野では、これまで日本企業がトルクメニスタン人学生の日本への留学を支援してきました。今後、トルクメニスタン技術者の訪日研修も開始されます。人材育成をともなった技術移転こそ、日本が得意とするものであり、本当の意味で技術が根付き、活かされる一番の近道でありましょう。

日本とトルクメニスタンの協力の地平はまだまだ広がります。

トルクメニスタンは現在、地域とカスピ海を縦横につなぐ鉄道建設に注力しています。地域を連結するインフラ整備は、ガスを加工して得られた様々な製品の輸出を促進します。そして日本の金融諸機関が持つ強いファイナンス・保険能力や、日本企業が持つマーケティング能力がこれを後押しすることになります。

さらには、火力発電所の高効率化や低炭素技術は、トルクメニスタンの持続的な発展を可能にします。

また、日本の先進医療技術への関心がトルクメニスタンで大変高まっているようですが、安倍政権の成長戦略において、医療技術の輸出はまさに最優先課題であり、ここでも両国の息はぴったりと合っています。

農業も協力の地平にあります。ここでは、日本が一方向的に教えを垂れるという関係ではありません。トルクメニスタンはメロンの名産地ですが、皆さんは日本の福島県で、トルクメニスタン原産のメロンを無農薬・有機栽培で育てている農家があることをご存知でしょうか。小川さんという方です。この方は東京大学農学部卒の農学者で、トルクメニスタンのアナウ市にある国立農業科学研究所で1年間、乾燥地での無灌漑農業の技術を研究したそうです。トルクメニスタンの品種と会津在来の瓜を交配した品種は、大変肉厚で糖度が高いそうです。

4. 結び

大統領閣下、そして御列席の皆様、

わたしが日本とトルクメニスタンが互いに強く惹かれあう関係にあると言った理由がお分かりいただけましたでしょうか。両国民には共通の精神性があります。そして、両国の協力関係には明確な戦略性があります。両国がパートナーにならない理由はありません。

日本とトルクメニスタンとの新しいパートナーシップは、やっと始まったばかりです。しかし、そこにはとてつもなく豊かな可能性が秘められています。大統領閣下が正しく指摘されているとおり、両

国は将来にわたる長期的なパートナーです。まさに、出会うべくして出会ったと言えましょう。

お互いに理解を深め、一つ一つの事業を成功させていきながら、アジアを跨ぐ大きな大きな連帯の橋を築いていこうではありませんか。

御清聴、有難うございました。

(以上)